

令和5年度京都府中学校教育研究会 道徳教育研究大会

主体的に深く考える道徳科の創造

～語り合い学び合う授業を目指して～



舞鶴赤レンガパーク

令和5年11月22日（水）

京都府中学校教育研究会
舞鶴市立和田中学校

目 次

◆ あいさつ	1
◆ 大会要項	2
◆ 公開授業指導案	4
舞鶴市立和田中学校・舞鶴市中学校教育研究会道德教育部	
◆ 実践交流	16
A 亀岡地域 B 南丹・船井地域 C 綾部地域	
D 福知山地域 E 与謝地域 F 京丹後地域	
◆ 研究発表	30
京都府中学校教育研究会 道德研究部会	
◆ ご講演メモ	36
十文字学園女子大学教育人文学部児童教育学科 教授	
文部科学省初等中等教育局教育課程課 前教科調査官 浅見 哲也 氏	

ごあいさつ



京都府中学校教育研究会
道徳研究部会長 福本 浩介
(舞鶴市立城南中学校長)

令和5年度京都府中学校教育研究会道徳教育研究大会の開催に際し、ごあいさつとお礼を申し上げます。

当研究部会におきましては「主体的に深く考える道徳科の創造～語り合い学び合う授業を目指して～」の研究主題のもと、令和3年度近畿中学校道徳教育研究大会京都大会における研究成果を継承しつつ「道徳科の指導におけるさらなる質的改善」を目指して研究実践に励んで参りました。

「特別の教科」として改めて道徳科の注目度が高まり、全国で熱心に研究実践を進めているところに、新型感染症の世界的な蔓延や国際的な紛争を迎え、加えて AI・ICT の劇的な進歩等、まさに目まぐるしく変化する、先の見通せない時代に突入しました。

「GIGA スクール構想」が打ち出されて4年が経とうとしています。この間、急速な一人1台タブレット端末の普及と同時に、ICT の有効な活用が進められてきました。道徳科の授業においても、「機器の特性を活かし本当に必要な場面を的確に見極め、必要に応じて効果的に使う」段階です。

研究大会で取りあげました道徳アンケートの実践につきましては、質問項目を新たに追加し、府内の全生徒及び抽出教員を対象に実施しました。ビッグデータの分析結果は我々の現在地をリアルに示し、いずれ展望へと導く羅針盤となると捉えています。精度を高め、授業改善や評価の工夫等へとつなぐために京都府下各支部との丁寧な連携を継続しています。

子どもたちが自分自身の強さ・弱さと向き合い、適切に人と関わり、美しいもの・崇高なものを探究し、より良く生きるうえで「全ての学校教育活動を通じて行う道徳教育と、その要となる道徳科の授業」が果たす役割は計り知れません。本研究大会を契機にますますの研鑽に励む所存でございます。

本日も講演いただきます文科省前教科調査官 十文字学園女子大学教授 浅見 哲也 様には「未来を創る子供たちの道徳性を養う道徳教育」と題して貴重なご教示をいただきます。誠にありがとうございます。

結びに、本研究会の活動推進にあたり、京都府教育委員会、京都府総合教育センターをはじめ、多くの皆様に多大なるご支援、ご指導、ご協力をいただきましたことに、心より感謝申し上げます。

令和5年11月

令和5年度京都府中学校教育研究会 道徳教育研究大会 要項

1 研究テーマ 「主体的に深く考える道徳科の創造」～語り合い学び合う授業を目指して～

2 日 時 令和5年11月22日(水) 13:00～17:00

3 会 場 舞鶴市立和田中学校

4 主 催 京都府中学校教育研究会・舞鶴市立和田中学校

5 後 援 京都府教育委員会・舞鶴市教育委員会

6 日 程

12:35 13:00 13:50 14:00 14:35 14:45 15:00 15:20 15:35 15:45 16:45 17:00

受付	公開授業 3学年公開	移 動	実 践 交 流	休 憩	全 体 会					
					開会 行事	研究 発表	指導 講評	休 憩	講 演	閉会 行事

(1) 公開授業 **(参観学級の指定はございません。)**

学年・組	指 導 者	資 料 名	内容項目
1年1組、3組	T1 井上 侑 T2 大戸 充晴 T3 西垣 亜紀子 (個別支援)	言葉の向こうに	B-(9)
1年2組	T1 高木 友樹 T2 谷田 翔太郎	撮れなかった一枚 の写真	D-(22)
2年1組、3組	T1 仙石 義生 T2 光枝 祐人 T3 山本 久美子	桃太郎の鬼退治	B-(9)
3年1組	T1 二谷 亮輔 T2 小谷 美佐子	二通の手紙	C-(10)

(2) 実践交流 **(A～Fの6地域の中から2地域を選択し、ご参加ください。)**

A 「語り合い、学び合う道徳科の授業を目指して」～亀岡ブロック各校の取組より～

亀岡市立東輝中学校 教諭 六島 悠喜

B 「地域の特色を生かした道徳教育」～南丹・船井地域の取組を中心に～

南丹市立八木中学校 教諭 濱崎 早智

C 「小中一貫の視点で目指す道徳教育の充実」～「考え、議論する道徳」の実現にむけて～

綾部市立綾部中学校 教諭 船越 美里

D「自己を見つめ、よりよく生きようとする生徒の育成」～学び合い、つながり合い、深め合う授業として～

福知山市立日新中学校 教諭 田中 昭徳

E「語り合い学び合う授業作りの研究を深める」

与謝野町立江陽中学校 教諭 太田 健策

F「よりよい評価に向けて市全体で取り組んできたこと」

京丹後市立網野中学校 教諭 辻 沙佑美

(3) 全体会

ア 開会行事

(ア) 挨拶

京都府中学校教育研究会道徳研究部会
舞鶴市立和田中学校

部会長 福本 浩介
校長 山下 博伸

(イ) 来賓紹介

京都府中丹教育局
舞鶴市教育委員会

局長 宮下 繁
教育長 廣瀬 直樹

(ウ) 日程説明

イ 研究発表

「特別の教科「道徳」の質的転換をめざして
～京都府下全校でのアンケートをもとに～」

京都府中学校教育研究会道徳部専門研究員

専門研究員 田中 昭徳

ウ 指導講評

京都府教育庁指導部学校教育課

指導主事 中村 一也

エ 講演

演題 「未来を創る子供たちの道徳性を養う道徳教育」

講師 十文字学園女子大学教育人文学部児童教育学科 教授

文部科学省初等中等教育局教育課程課 前教科調査官 浅見 哲也 氏

オ 閉会行事

挨拶

京都府中学校教育研究会道徳研究部会

副部会長 菊井 雅志

7 会場のご案内 舞鶴市立和田中学校 (住所 〒625-0085 京都府舞鶴市和田 640-4 電話 0773-62-0507)



- ・お車でお越しの方
舞鶴若狭自動車道
舞鶴西 IC より車で約 25 分
舞鶴東 IC より車で約 20 分
- ・公共交通機関でお越しの方
JR 東舞鶴駅から京都交通バス
41 系統和田線に乗車し、
バス停「和田」で降車。
徒歩 5 分

8 問合せ先 【大会事務局】 舞鶴市立城南中学校 校長 福本 浩介

〒624-0823 京都府舞鶴市字京田 30 番地

電話 0773-75-0137

特別の教科道徳学習指導案

指導者名 T1 井上 侑
T2 大戸 充晴
T3 西垣亜紀子
(個別支援)

- 1 対象 第1学年1組、3組 計20名
- 2 日時 令和5年11月22日(水) 第5校時 13:00~13:50
- 3 場所 1年1組教室
- 4 主題名 他者から謙虚に学ぶ【相互理解、寛容】(内容項目 B- (9))
- 5 教材名 「言葉の向こうに」(「中学道徳1 きみがいちばんひかるとき」光村図書より)

6 主題設定の理由

(1) ねらいとする価値

「中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別の教科 道徳編」では、【内容項目 B相互理解、寛容】について、「自分の考えや意見を相手に伝えるとともに、それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなもの見方や考え方があることを理解し、寛容の心をもって謙虚に他に学び、自らを高めていくこと」と示されている。社会の中で生きていくうえで色々な意見があることを理解し、様々な考えや立場を尊重し、お互いに認め合って行動する実践意欲と態度を育てたい。

(2) 生徒の実態

本学級の生徒は、違いを認めることがよいことであるという価値観は持っているものの、いざ立場の違う人がいた時は関わらないようにしたり、自分の意見は曲げないようにしたりするなどの行動をとり、互いの違いから学ぶという行動をとる生徒は多くはない。他者の意見を認め、素直に受け入れる謙虚さを身に付けることで、他者から学んでいくことがよりよい人間関係の構築につながることに気付かせたい。

(3) 教材について

ある中学生が SNS でのトラブルを通して、立場の違うものに関わる上で大切なことに気付く話である。主人公は自分の応援している選手が非難されている状況を見て、はじめは何とか助けたいと思って発信している。しかし、いつのまにか応援している選手のための発信ではなく、反対意見の人と喧嘩をするような自分本位の発信になってしまう。このようなことは SNS だけでなく、日常生活の中でも生徒たちは経験している。主人公の気付きから相手の思いを考えることで、異なる立場の者同士のコミュニケーションの在り方について考えさせたい。

7 本時のねらい

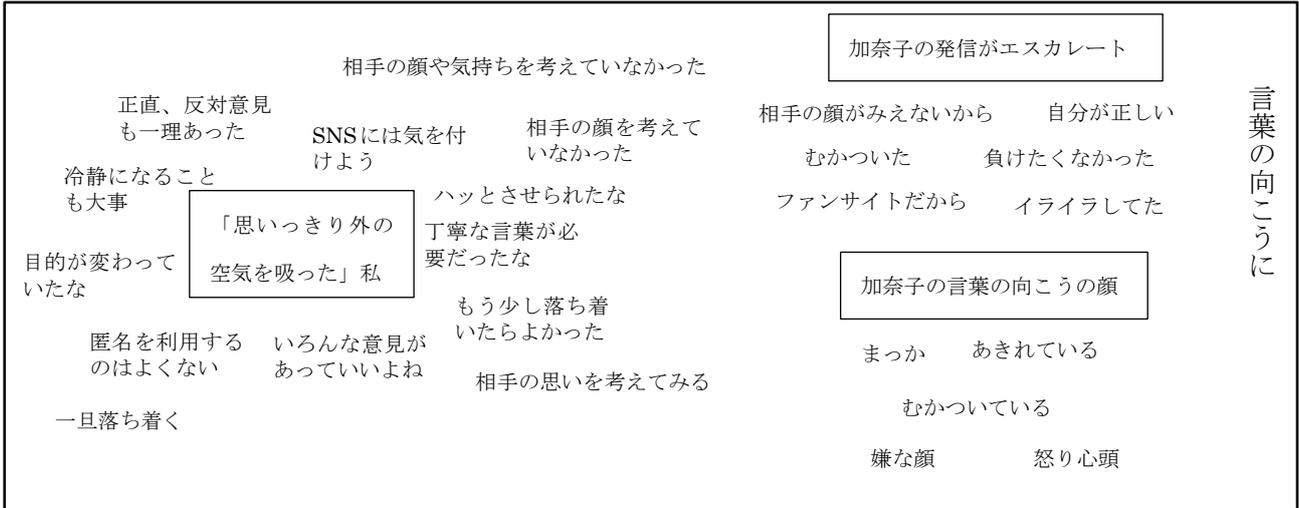
異なる立場の者同士のコミュニケーションの様子から、相手の思いを想像することを通して、他者の立場に立って考えようとする実践意欲と態度を育てる。

8 本時の展開

過程	学習活動	主な発問 予想される生徒の反応	指導上の留意点 T1: 発問 T2: 板書 T3: 個別支援
導入	1 自分を振り返る	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">○言い争いをしたことがありますか。</div> <ul style="list-style-type: none"> ・ある。 ・ない。 	※T1T2 で生徒の発言を拾う。

展 開	2 範読を聞く。		<p>※T1:主人公の立場 T2:主人公と反対の立場で範読する。</p>
	3 加奈子の心情を理解する。	<p>○加奈子の発言がエスカレートしたのはどうしてでしょうか？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・なぜ非難されるのかわからなかった。 ・悪口を言われて我慢ができなかった。 ・自分の方が正しいと思っていた。 ・A選手を守りたいと思った。 	<p>※T1T2で生徒の発言を拾う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・加奈子は冷静でいられなくなるくらい感情でいたことを理解させる。 <p>※T1T2で机間指導をして、様々な視点で意見を拾う。</p>
	4 加奈子の気づきを考える。	<p>◎「思いっきり外の空気を吸った」私はどんなことを思っていたらう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・相手は攻撃するつもりでなかったのかもしれない。 ・もしかして、自分は間違っているかもしれない。 ・様々な意見があって、それでいいんだ。 ・相手を批判するばかりではなく、相手の意見や助言を聞くことも大事だ。 ・相手を不快にさせないように、自分の意見を言えばよかった。 ・自分の言った言葉で相手を傷つけてしまうかもしれないから、相手の気持ちを考えて、行動する。 ・違いの中にも共通点があるかもしれない。そこを考えることが大切。 ・相手は自分の想像を超えてしまうこともある。自分本位で考えない。 	<p>【切り返し発問】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・相手はどう思っていたのだろうか。 ・相手はどんな考えだと思ったのだろうか。 ・どうして、相手のことを考えることは大事なのだろうか。 <p>*行動の奥にある、心の部分に迫るように、何度も問い返す。</p>
終末	5 本時の授業を通して、これからの自分の生き方について考えたことを振り返る。	<p>○今日の学習を通して、これからの自分の生き方について考えたことを道徳ノートに振り返りましょう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学習を振り返り、これからのような考え方をもち生きていくことが大切なのか振り返らせる。

<板書計画>



特別の教科道徳学習指導案

指導者名 T1 高木 友樹
T2 谷田翔太郎

- 1 対象 第1学年2組 19名
- 2 日時 令和5年11月22日(水) 第5校時 13:00~13:50
- 3 場所 1年2組教室
- 4 主題名 気高く生きようとする心【よりよく生きる喜び】(内容項目 D-(22))
- 5 教材名 「撮れなかった一枚の写真」(「中学道徳1 きみがいちばんひかるとき」光村図書より)

6 主題設定の理由

(1) ねらいとする価値

「中学校学習指導要領(平成29年度告示)解説 特別の教科 道徳編」では、【内容項目Dよりよく生きる喜び】について、「人間には自らの弱さや醜さを克服する強さや気高く生きようとする心があることを理解し、人間として生きることの喜びを見いだすこと」と示されている。フォトジャーナリストの吉田レイ子さんが感じた、ベトナム戦争取材中の葛藤を通して、ヒューマニズムや職業観について考え、人としての自分を知り、自分らしく生きていこうとするための判断力を育てたい。

(2) 生徒の実態

普段から元気がよく、男女仲良く楽しく学校生活を送っている。一方、関わり合うことに苦手意識をもったり、グループが固定化したりするなど、小学校からの人間関係が影響している様子も見られる。例えば、何かを決めるときに自分の意見を言うことが周りにどんな影響を与えるかを考えるあまり、周囲の人に合わせてしまう傾向がある。また、自信がなく、チャレンジすることを恐れる姿勢も見られる。自己の弱さを自覚し、生き方や自己の在り方を考えることが大切であることに気付かせたい。また、自分で選択したことを振り返り、自分の弱さを受け入れ、乗り越えようとするのが大切であることにも気付かせたい。

(3) 教材について

本教材は、フォトジャーナリストの吉田レイ子さんがベトナム戦争の取材中に、ある親子を見て抱いた葛藤を記した文章である。親子の写真を撮ることができなかった吉田レイ子さんはプロのフォトジャーナリストではないと自分を責めたが、帰国後あの写真は撮らなくてよかったと感じた。その時の葛藤や「私は一人の普通の人間でありたい」という言葉に込められた彼女の想いを考えることで「よりよく生きるために大切なことはどのようなことか」を考えさせたい。

7 本時のねらい

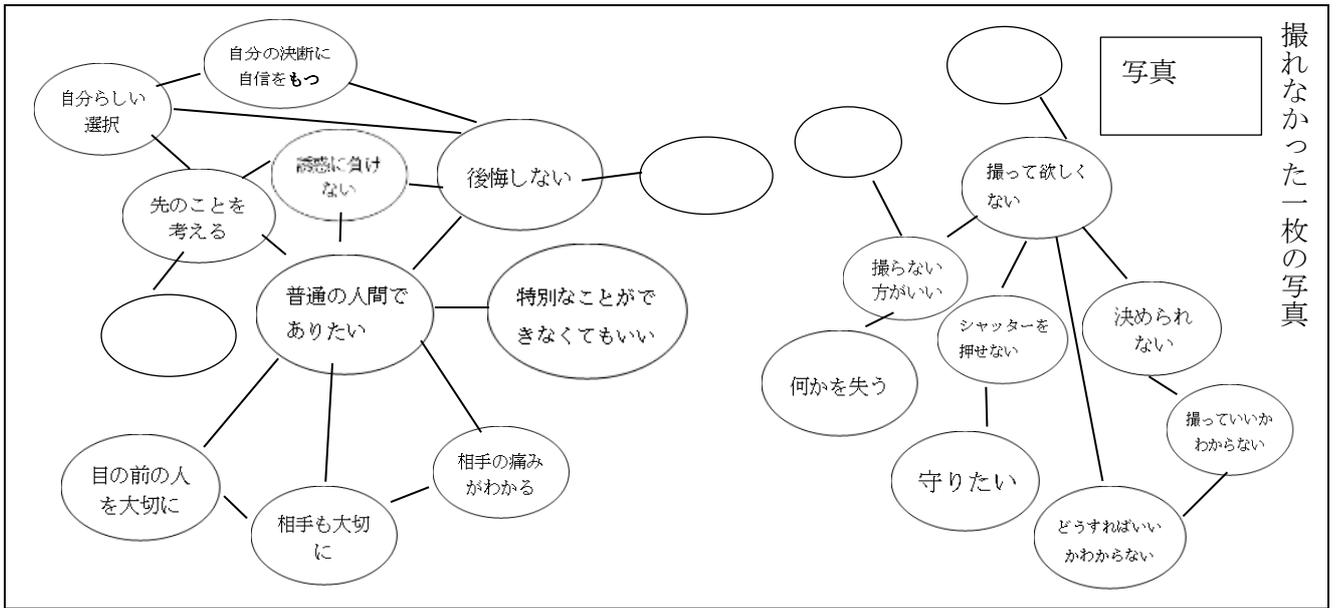
職業、あるいは人としての立場に葛藤する吉田さんの気持ちを考えることを通して、どのような結果になっても、自分で選択したことに対し誇りを持ち、生活をしていこうとする道徳的判断力を育む。

8 本時の展開

過程	学習活動	主な発問 予想される生徒の反応	指導上の留意点 T1:発問 T2:板書
導入	1 フォトジャーナリストの仕事とピューリッツァー賞について知る。	・ どうしてそのような写真を撮ったの。 ・ この写真見たことある。	・ 写真にも賞があることを確認させる。 T1:資料を範読する。 T2:資料を範読する。(吉田さんについて)

展 開	2 資料を読む。		<ul style="list-style-type: none"> ・物語の内容を確認させる。
	3 吉田さんの行動を通して、思いを考える。	<p>○吉田さんはどうしてシャッターを押すことができなかったのだろう？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・母が子を隠して、撮って欲しくなさそうだったから。 ・母が子を守りたそうだったから。 ・撮らない方がいいと感じたから。 ・どうすればいいか決められなかったから。 	<p>※T1T2 で役割分担をして、机間指導することにより、生徒の発言を拾い、全体に投げかける。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・吉田さんの行動についておさえる。 ・吉田さんの行動には多くの葛藤があることを考えさせる。
	4 吉田さんの立場に立ち、吉田さんの決意を支える思いについて考える。	<p>◎「プロのフォトジャーナリストである前に、私は一人の普通の人間でありたい」とはどういうことだろう？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・後悔しないように生きたい。 ・一時の欲や感情で決めるのではなく、先のことを考えてい。 ・自分も相手も思いやりたい。 ・自分がその時に感じたことを大切にしたい。 ・自分らしい選択をしていきたい。 ・自分に誇りをもつ生き方がしたい。 ・自分の弱さを向け入れて生きる ・自分の感情を信じ、他人の気持ちも考えられる。 ・自分の気持ちに恥じないこと ・自分の選択を向け入れて、生きていく糧にすること 	<ul style="list-style-type: none"> ・先人の気高い生き方から、内なる自分に恥じない生き方をするために必要なことについて考えさせる。 <p>【切り返し発問】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・シャッターを押せなかったのは、どんなことを考えたからだろう。 ・吉田さんってどんな人だろう。 ・普通の人間とはどういう存在？ ・吉田さんはどうしてあの状況と事実を見せられたことが重要なことだと感じたの？
終末	5 本時の授業を通して、これからの自分の生き方について考えたことを振り返る。	<p>○今日の学習を通して、これからの自分の生き方について考えたことを道徳ノートに振り返りましょう。</p>	<p>※T1T2 で役割分担をして、様々な視点で意見を拾い、全体に投げかける。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習を振り返り、これからどのような考え方をもち生きていくことが大切なのか振り返らせる。

<板書計画>



撮れなかった一枚の写真

特別の教科道徳学習指導案

指導者名 T1 仙石 義生
T2 光枝 祐人
T3 山本久美子

- 1 対象 第2学年1組、3組 計28名
- 2 日時 令和5年11月22日(水) 第5校時 13:00~13:50
- 3 場所 2年1組教室
- 4 主題名 「違いを尊重する」【相互理解、寛容】(内容項目 B- (9))
- 5 教材名 『桃太郎』の鬼退治(「中学道徳2 きみがいちばんひかるとき」光村図書より)

6 主題設定の理由

(1) ねらいとする価値について

「中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別の教科 道徳編」では、【内容項目 B 相互理解、寛容】について、「自分の考えや意見を相手に伝えるとともに、それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなもの見方や考え方があることを理解し、寛容の心をもって謙虚に他に学び、自ら高めていくこと」と示されている。

人にはそれぞれ、自分のもの見方や考え方があり、個性がある。相手の存在の独自性を認め、相手の考えや立場を尊重することが大切であり、自分自身も他者も、それぞれのもの見方や考え方にとらわれ、過ちを犯しやすい人間であると深く理解することで、自分と異なる他者の立場や考え方を尊重することができる。寛容の心をもつことで、とがめだてしないで人を許し受け入れ、他者のよい面を積極的に認める心情を育成したい。

(2) 生徒の実態

全体的に学習や行事ごとに積極的に参加する生徒が多く、それぞれ自分なりの意見や考えをしっかりと持っている。しかし、自分の意見や考えに少し自信が無く発表することが苦手な生徒や、考え方が幼く他者の立場や心情を考えることが苦手な生徒も一定数いる。また、幼少期より同じ集団で育っていることもあり、固定化された人間関係がなかなか変わらない現状もある。そこで、多面的に物事を見て自分が他者と異なってもよいということを理解し、お互いの思いを出し合ったり折衷案を考えたりすることで、合意形成を図ろうとする心情を育てたい。

(3) 教材について

本教材は、前半は昔話の「桃太郎」で、後半は鬼の子の立場から桃太郎を捉えた坂田寛夫の詩「鬼の子守唄」で構成されている。一度は読んだことがある「桃太郎」を異なる目線から考えることで、それぞれの立場があることを理解したり考えたりすることができる。ただし、あくまで「相互理解、寛容」の学習なので、後半の鬼の子の気持ちに寄り添いすぎないように両者の目線から冷静に考えさせたい。

7 本時のねらい

一方的な物事の見方や捉え方で判断するのではなく、それぞれの個性や立場を尊重して、多面的に物事を見て考えることで相互に理解し、お互いを尊重する心情を育てる。

8 本時の展開

過程	学習活動	主な発問 予想される生徒の反応	指導上の留意点 T1：発問 T2：板書、机間指導 T3：板書、机間指導
導入	<p>1 「桃太郎」の話を読む。</p> <p>2 桃太郎の鬼退治が正しかったのか考える。ロイロノートでそれぞれの意見を賛成→青、反対→赤 とし提出箱で集約し、理由もできれば書く。</p> <p>3 本時のめあてを確認する。</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">○桃太郎の鬼退治は、正しいと思いますか？</div> <ul style="list-style-type: none"> ・正しいと思う。鬼が悪いことをしたのだから。 ・宝物を取り返したから正しい。 ・正しくないと思う。取り返した宝を村に持ち帰って持ち主に返していないから。 	<p>T1：机間指導と発問 T2：「桃太郎の鬼退治」の範読 T3：机間指導</p> <ul style="list-style-type: none"> ・鬼退治が正しかったかどうか自分の考えを持たせる。
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;">鬼退治をそれぞれの立場から考えてみよう</div>		
展開	<p>4 「鬼の子守唄」を読む。</p> <p>5 ディスカッション形式で「桃太郎」、「鬼」の立場で考える。</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">○桃太郎の鬼退治の結末はめでたし、めでたしだったのでしょいか？</div> <p>桃太郎の視点：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・悪者の鬼を退治できたからめでたし。 ・鬼退治をしないといつまでも鬼は同じことをしたからめでたしだと思う。 <p>鬼の視点：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・鬼の子がかawaii そうな思いをしたからめでたしじゃない。 ・めでたしでないと思う。痛めつけなくても他にやり方があったと思う。 	<p>T1：机間指導・発問・切り返し T2：机間指導・切り返し T3：「鬼の子守唄」の範読・切り返し</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「鬼の子はかわいそうだが、そもそもなぜこんなことになってしまったのだろうか？」というような切り返し発問も行い、鬼の子に寄り添い過ぎないようにする。
	<p>6 お互いを尊重するために何が必要なのか考える。</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">◎一方的なめでたしめでたしを生まないために、どんなことが必要だったのでしょうか？</div> <ul style="list-style-type: none"> ・話し合うことが大切。何か事情があるかもしれないから。 ・相手がなぜそんなひどいことをしたのか一度考えてみる。 ・相手の事情を想像してみる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「なぜそれが大事なのか」「それが無いとどうなるか」を何度も問いかける。 ・行動や表面的な回答に対して切り返し発問でその心情や考えを問う。

		<ul style="list-style-type: none"> ・噂だけで物事を判断するのはよくない。相手を知ろうとすることが大事。 ・自分の思いもきちんと伝えてみる。 	
終末	7 本時の授業を通して、これからの自分の生き方について考えたことを振り返る。	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>○今日の学習を通して、考えたことを道徳ノートに振り返りましょう。</p> </div>	<p>※T1、T2、T3 で机間指導をする場所を役割分担し、様々な視点で意見を拾い、全体に投げかける。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習を振り返り、これからのような考え方をもって生きていくことが大切なのか振り返らせる。

〈板書計画〉

<p>めあて <u>鬼退治をそれぞれの立場から考えてみよう</u></p> <p>○桃太郎の鬼退治は、めでたしめでたしだったのか。</p>		<p>◎一方的なめでたしめでたしを生まないため必要なことは？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・話合う→何か事情があるかもしれない ・相手がなぜそんなひどいことをする必要があったのか一度考えてみる ・相手の事情を想像してみる ・相手の個性を認める
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">桃太郎の 写真</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block; margin-left: 20px;">青</div> <ul style="list-style-type: none"> ・鬼が悪いことをしたから ・宝物を取り返したから ・鬼退治をしないといつまでも鬼は同じことをしたと思うから ・悪者の鬼を退治できたから ・鬼がこれ以上悪さをできなくなったから 		
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">鬼の写真</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block; margin-left: 20px;">赤</div> <ul style="list-style-type: none"> ・取り返した宝を村に持ち帰って持ち主に返していないから ・話し合うこともせずにいきなり鬼を倒したから ・殺さなくてもほかにやり方があったのでは ・鬼の子がかわいそうな思いをしたから ・鬼の子が成長して復讐しに来るから 		

特別の教科道徳学習指導案

指導者名 T1 二谷 亮輔
T2 小谷美佐子

- 1 対象 第3学年1組 31名
- 2 日時 令和5年11月22日(金) 第5校時 13:00~13:50
- 3 場所 3年1組教室
- 4 主題名 ルールやきまりの意義【遵法精神、公德心】(内容項目 C- (10))
- 5 教材名 「二通の手紙」(「中学道徳3 きみがいちばんひかるとき」光村図書より)

6 主題設定の理由

(1) ねらいとする価値

「中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別の教科 道徳編」では【内容項目 C 遵法精神、公德心】について、「法やきまりの意義を理解し、それらを進んで守るとともに、自他の権利を大切に、義務を果たして、規律ある安定した社会の実現に努めること」と示されている。人間は社会集団に属し、人々と関わりながら生活している。社会の中で人々の利益がぶつかり合い、対立が発生すると社会集団としての秩序と規律が崩れてしまう。「法やきまり」があることは社会集団が秩序を与え、対立を防ぐことにもつながっている。また、社会の規律と秩序を守ることによって、自分や他者の自由や権利が守られている。しかし、人間はその時の感情に流されて、きまりを破ってしまうこともある。きまりを守ることの難しさに触れつつ、きまりの意義について考えることで、規律ある安定した社会の実現に努めようとする実践意欲を養いたい。

(2) 生徒の実態

本学級の生徒は、身の回りや学校のきまりなどを守って、協力したり助け合ったりしながら日々の生活を送ることができるようになってきた。例えば、修学旅行に向けた取組では、ルールや持ち物について全員で検討し、声を掛け合いながらより良い修学旅行になるよう行動してきた。その一方で、「自分の思いを優先してしまう」「周りがきまりを守っていないから守らない」などの姿が見られる場面がある。また、幼少期から同じ集団で育ってきていることもあり、固定化された人間関係が変わりにくい。そのため、自己主張や目立つことを嫌ったり、自分の意見を言えずに周りに合わせた行動をとってしまったたりする場面も多い。これからより広い社会の中で生活をしていく上で、自分や他者の権利を守るためにも法やきまりの意義について主体的に考え、自分たちの社会をより良いものに変えていこうとする実践意欲を育てたい。

(3) 教材について

動物園の職員として数十年働いていた元さんが毎日のように動物園に訪れる幼い姉弟に同情し、園の規則を知っていながら、規則を破って入園させてしまう。後日、幼い姉弟のことを思って元さんがとった行動に対して、「母の手紙」と「動物園からの手紙」の二通の手紙が送られてくる。元さんが手にした二通の手紙を通して、心の葛藤から生まれる規則を守ることの難しさや規則が何のためにあるのかといった法やきまりの意義について考えさせたい。

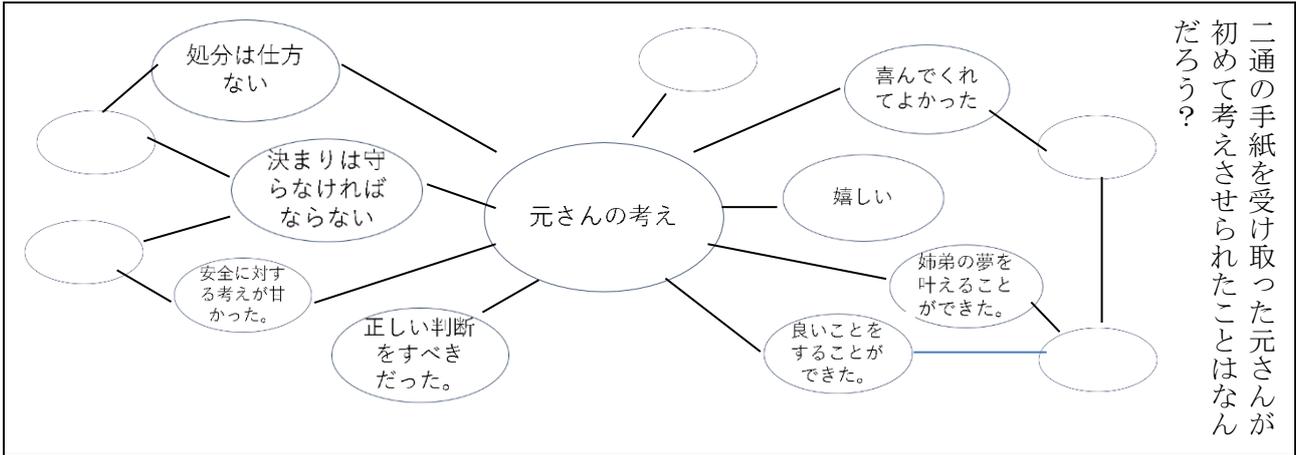
7 本時のねらい

規則を守ることが、自分や他者を守ることにつながるということを考えさせ、それらを進んで守るとともに、規律ある安定した社会の実現に自ら努めようとする実践意欲を養う。

8 本時の展開

過程	学習活動	主な発問 予想される生徒の反応	指導上の留意点 T1：発問 T2：板書
導入	1 資料を読む。		<ul style="list-style-type: none"> ・ T1：範読する。 ・ T2：手紙を範読する。
展開	<p>2 受け取った二通の手紙から元さんが学んだことを考える。</p> <p>3 ルールやきまりの意義について考える。</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>◎二通の手紙を受けとって元さんが初めて考えさせられたことは何ですか？</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・ きまりは守らなければならない。 ・ 子どもたちだけで入園させたことは優しさではない。 ・ 安全に対する考えが甘かった。 ・ その時の感情に流されずに正しい判断をすべきだった。 ・ 何のために規則があるのか改めて考えさせられた。 ・ 自分の想いを優先させてしまったことへの後悔があった。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>○ルールやきまりは何のためにあるのだろう？</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・ 対立やトラブルを避けるため。 ・ 秩序を守るため。 ・ 自分や他者の権利を守るため。 	<p>※T1T2で役割分担をして机間指導することにより、生徒の発言を拾う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 情に流されて規則を破ってしまう弱さに目を向けつつ、規則の意義やそれらを守ることの大切さについて考えさせる。 <p>【切り返し発問】</p> <p>T1：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ この動物園の規則は何のためにあるのか？ ・ なぜ、子どもたちだけで入園させてはいけない規則があるのか？ ・ なぜ、職場を去る際に晴れ晴れとした顔をしていたのか？ ・ 二通目の手紙は「何」に対する処分？ ・ 園の規則は何のためにあるのか？ <p>T2：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 元さんのおかげで子どもたちは救われたのではないか。 ・ 子どもへの気持ちを無視してもいいのだろうか。 ・ ルールを守ることで、悲しむ人が出るのなら、ルールを破ってもいいのではないか。
終末	4 本時の授業を通して、これからの自分の生き方について考えたことを振り返る。	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>○今日の学習を通して、これからの自分の生き方について考えたことを道徳ノートに振り返りましょう。</p> </div>	<p>※T1T2で役割分担をして、様々な視点で意見を拾い、全体に投げかける。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学習を振り返り、これからどのような考え方をもって生きていくことが大切なのか振り返らせる。

<板書計画>



語り合い、学び合う道徳科の授業を目指して

～ 亀岡ブロック各校の取組より～

亀岡市立東輝中学校 教諭 六島 悠喜

1 はじめに

本市は世界的な観光都市・京都市の西に位置し、古来より旧・丹波国の中心地として発展した、豊かな水脈と森林、そして伝統の息づく生涯学習都市である。現在、市内7中学校と1義務教育学校が連携をしながら積極的に研究と実践に取り組んでいる。本年度の研究目標を「主体的に深く考える道徳科の創造 ～語り合い、学び合う授業を目指して～」とし、各校の授業実践の充実を図ると共に、各校の取組の共有を行っている。

2 各校での実践

【輪番制で生徒理解を深める】

亀岡市の多くの中学校では、学年所属の教員が輪番で授業をする取組を進めている。授業者と担任が交流することで、担任が知らなかった生徒の深い考えや新たな一面を知るきっかけを作ることができる。授業後には、授業の内容や生徒の様子・発言などを交流し、指導法の改善や生徒理解の向上に努めている。また、毎時間の記録として、板書の写真や生徒の発言内容などを、授業者が「道徳ノート」に残している学校もある。

生徒たちも「色々な先生の、道徳科の授業が受けられて楽しい」という感想を述べている。

【力のある、オーソドックスな授業をやりきる】

一時間一時間の道徳科の時間を大切に、中心発問をどのようにすれば生徒一人一人の考えを引き出せるのか、深まりのある授業になるのかを考え、しっかりと一年間続けていくことを大切に取り組んでいる。

〈育親中学校〉



【自ら考え、自分の意見を発言する授業】

南桑中学校では継続して京都府指定事業「未来を拓く学校づくり」に取り組んでおり、道徳教育もその事業と連携し、考えを言葉で伝え合い語り合って自己肯定感を高めることを目標の一つとしている。

TTの授業や学年道徳にも取り組み、道徳通信等も発行して生徒の様子や考えが家庭にも届くようにしている。郷土や環境について考えた、市議員を交えての学年道徳は、考え合い語り合って思いを深める良い機会となった。

別院中学校(現在は南桑中学校と合併)は小規模校であるため、どの発問に対しても全員に発言の機会があり、全員でロールプレイに参加することもできる。この利点を活かし、生徒たちが互いの思いを聞き、自身の視野を広げ、他人任せにすることなく、より考えを深めていける授業作りをすすめている。

〈南桑中学校・別院中学校〉

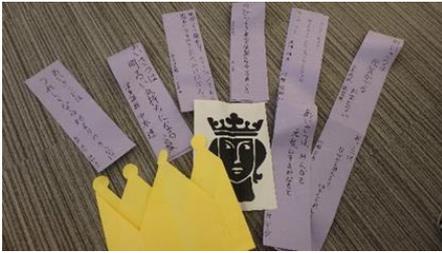


【異年齢交流での授業】

義務教育学校である亀岡川東学園では、前期生と後期生が同じ校舎で学校生活を送っている。

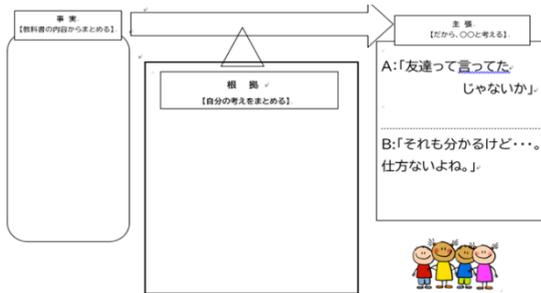
そこで異年齢交流も盛んに行われており、今年度は道徳の授業で8年生(中学2年生)と4年生が交流学习を行った。4年生と8年生では、発達段階に差も見られるので教材選びの難しさもあったが、「あいさつのきらいな王様」(内容項目:礼儀)という絵本を資料として教師が寸劇をしながら、8年生と4年生がペアになって教師の発問について考えるという授業形態をとった。そして最後にペアであいさつに関する標語を考え、掲示した。8年生は先輩として4年生にアドバイスをする場面が見られ、とても良い雰囲気で見聞を出して交流することができた。生徒や児童も「楽しかった」「また、やりたい」という感想を述べ、異年齢交流による効果を実感することができた。

〈亀岡川東学園〉



【三角ロジックを用いた授業】

「三角ロジック（事実・データ〔根拠〕を基に、自分なりの理由付けを行い、論理的に自分の意見を考える）」を取り入れ、論理的思考力を向上すべく、様々な授業や場面で活用している。道徳科においても、三角ロジックを取り入れて授業を行っている。三角ロジックを用いたワークシートでは、流れを明確にすることで、自分の考えを可視化することができる。それにより、道徳の教材を通して、より深く考えたり仲間と意見交流をしたりと、自分を広げる時間になっている。〈亀岡中学校〉



【タブレットの活用】

一人一台のタブレットの導入により、道徳科の授業でもタブレットの活用が進んできた。各教室のモニターに示される動画や写真は、学びを深める手段の一つとして効果的である。

特に、「意見の集約や交流をする」「他者の考えに対する感想や学びを述べる」「アンケートを行い意見の分布を整理する」などの、ロイロノートの活用が広がっている。ロイロノートで、自分の意見や立場をカードの色で示して提出し、クラス全体の意見を知るといのは、視覚的に分かりやすく効果的であった。

また、これまで文字を書くことに苦手意識があり、なかなか書けなかった生徒も、タブレットで文字を打つことで、自分の思いを表現できるようになってきた。また、画面を見せながら話せるので、友達と意見を共有しやすくなっているように思われる。

その一方で、画面と向き合う時間が増えていく中で、生徒対生徒、生徒対教師の対話を意図的に

設定していく必要がある。

〈東輝中学校・詳徳中学校〉



【研究の充実】

大成中学校では、校内授業研修会の一環に道徳を位置付け、1学期は3年生、3学期は2年生（本年度は11月に実施）の各教科、そして、2学期に1年生で道徳の公開授業を年間行事として実施してきた。

特に、本年度は、亀岡市中学校教育研究会の研修と兼ね、各校の道徳主任の教員も含めての研究授業であった。「ロイロノートの活用法」をテーマの一つに掲げ、1年生の4学級で授業を行った。授業後は、学級ごとの事後研ならびに、道徳主任会において研修を行い、より充実した道徳の授業の在り方について深めることができた。

〈大成中学校〉



3 おわりに

生徒たちが自身の考えを伝え合い、それにより考えが深まっていくよう、各校、様々な工夫をしながら道徳科の授業を進めている。実践し、効果的であった方法や取組については、引き続き亀岡ブロック全体で交流し、授業の充実に繋げていく。タブレットの導入により、道徳科の授業でも活用が求められる中、生徒が主体的に深く考えられるツールとしての、より良い活用方法について引き続き検討していきたい。

地域の特色を生かした道徳教育

～ 南丹・船井地域の取組を中心に～

京都府南丹市立八木中学校 教諭 濱崎 早智

1 はじめに

(1) 地域の概要

南丹市、京丹波町は、平成 18、17 年に合併により誕生し、多くの歴史遺産や質の高い農産物が生産されている自然豊かな地域である。

(2) 「故郷を愛する心の醸成」

南丹市、京丹波町には、従来から子どもは地域の宝として大切に育んでいこうとする風土がある。この点を強みとし、「地域の特色を生かした道徳教育の一層の充実」を図るため、南丹市教育の指針にもある次の 2 点について、南丹・船井中学校教育研究会 道徳部（以下、中教研道徳部）共通の実践の方向性として確認し、取り組んでいる。

ア 地域・家庭・学校の三者で児童生徒の現状及び目指す子供像を共有し、その実現に向け地域総がかりで道徳性を育む「地域道徳」を推進する。

イ 道徳の全体計画や年間指導計画等を見直し、教科書をベースにした「考え、議論する道徳」の指導を確立し、地域・保護者が参画した魅力的な教材の開発を進め、共に学び育つ、地域の特色を生かした道徳教育を推進する。

また、「地域連携担当教職員」と地域コーディネーターとの円滑な連携により地域人材や資源を活用したふるさと学習や地域道徳を進める。

2 研究の概要と方向性

(1) 研究の過程

中教研道徳部では、「特別の教科 道徳」の全面実施を受けて、「よりよい生き方について、共に考える「特別の教科 道徳科」の授業の創造に向けて～子ども・教師・学校・保護者・地域のつながりの中で～」を研究主題として数年前より研究を進めてきた。

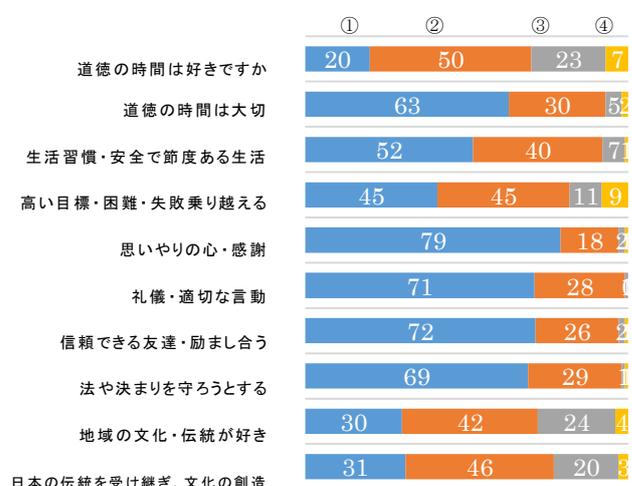
中教研道徳部では、読み物教材の「指導案の研究」を中心に公開授業による取組を進めている。毎年「考え、議論する道徳」や「生徒の主

体的・対話的で深い学び」を探る授業の構築、「評価について」等をテーマに活動を進め、年に 1 回の研究授業に取り組んでいる。指定した教材の指導案を各校で協議、作成し、自校の生徒にふさわしい指導案で事前授業を実施する。さらに研究会で指導案・生徒の反応等を持ち寄り、協議を重ね、よりよい指導案に改善し、ねらいに沿った授業を模索してきた。

また、各校の状況に合わせて、地域・保護者と連携の下、地域道徳に進んで取り組み、特色を生かした取組を展開しているところである。さらに昨年度は、今後の中教研道徳部の取組の方向性を探る材料として、「生徒の意識調査」を行った。その結果を受け、今年度、中教研道徳部の取組を展開した。

(2) 南船地域の生徒意識調査から

生徒の意識調査 令和 3 年度 全学年



①そう思う ②ややそう思う ③あまり思わない ④そう思わない

令和 3 年度、南船地域の全学年に「道徳意識調査」を行ったところ、上のような結果が得られた。特にこの地域の生徒の傾向として一般的な項目には「①そう思う②ややそう思う」が 9 割近くを占め、思いやり・礼儀・規範意識等しっかりと意識して生活をしていることが窺える。しかし、その中で特に目についたのは、「自分の住む地域の文化を好きになり、発展に努める」と「日本の優れた伝統を受け継ぎ、新しい文化の創造に貢献する」という項目において、「①そ

う思う②ややそう思う」が70%代、「③あまり
思わない④そう思わない」が20%後半に上っ
た。中教研道徳部としては、この点に着目し、
この地域の生徒たちが大人になり、「この地域の
ことが好きだ」、「この地域で育ってよかった。」
など、「地域が好きになり、誇りを持てる」よう
な取組を進めたいと考えた。

折しも、南丹市立八木中学校では、令和2年
度より八木中ブロックとして「道徳教育の抜本
的改善・充実に係る支援事業」の指定を受け、
地域の校種間連携の下、「地域道徳」の取組を
進めてきている。その取組を中心に報告する。

3 南船地域の取組

(1) 八木中学校

ア あいさつ運動

コロナ禍で、人との交流がしにくい社会
になったことを受け、もともと生徒会活動
として行っていた「あいさつ運動」を、「あ
いさつでつながる町 八木町」をモットー
にして、地域の学校や八木町の方々に働き
かけをする活動として取り組んだ。

朝、校門前でのあいさつ運動を行った。
参加者を増やす方策として、クラス対抗で
参加者を競い、参加者数のカラーシールを、
八木町の花火をイメージした掲示物に貼っ
て掲示した。最初は参加する生徒も少な
かったが、だんだんと広がりを見せ、多くの
生徒が参加するようになった。校門前を通
る地域の方々にも生徒達からあいさつが
できるようになった。PTAの方々にも積
極的にあいさつ運動に参加していただき、
家庭での3つのあいさつ運動（①「おは
よう」②「いただきます・いってらっし
ゃい」「ただいま・おかえり」③「おや
すみ」）を重視する期間を設け、各家庭
でも取り組んだ。

また、校区内の二つの小学校にも生徒
会が訪問し、朝のあいさつ運動を行い、「よ
りよい八木町を一緒につくっていこう」と
声をかけた。さらに、八木町全体のアピ
ールとして「あいさつで 今日も 八木町
絶好調」という「のぼり」を生徒会本部
がデザインし制作した。のぼりは、各町
内に設置され、のぼりと同じデザインの
「ステッカー」を八木町全戸に生徒自ら
が配布し、

あいさつの啓発も行った。

生徒の意見は「あいさつは苦手だったが、
参加して気持ち良かった。」「自分が
変わることができてうれしかった。」等。
PTAの意見は「中学校のあいさつ運動が
始まってから、子どもが変わった。」「
家の中だけでなく、地域の人にも自分
からあいさつしている子どもを見て驚
いた。」等。



あいさつのぼり完成・設置依頼

イ 親子・地域道徳（「みんなで道徳」）

従来から設定していた保護者対象の参
観日を「親子道徳」に当てた。

教材名「ようこそ やねせんへ」で、「郷
土を愛する心」を主題にして、生徒たち
が「これからもずっと残しておきたい
八木の風景」や「大切にしていきたい
こと」について意見交流をした。終末
には、地域の方々からいただいた「メ
ッセージ動画」を八木の風景と共に
流し、地域の方々の思いを受け取
った。保護者から「中学3年生の思
いを知ることができた。子どもたち
へのメッセージ動画、心が温まった。」
と交流の感想が寄せられた。

教材名「みんなで道徳～SNSのトラ
ブルについて」では、生徒と保護者
がグループで意見を交流した。保護
者の感想は「子ども達と触れ合い
ながらの面白い授業でした。また、
他のテーマでもするならばぜひ参
加したい。」「子どもの意見を聞
く良い一時でした。我が子と会
話をしようと思った。」等。

ウ YAGI サミット（パネルディスカ ッション）テーマ「あいさつについて」・「道徳の

授業について」

コーディネーター；京都産業大学教授
柴原 弘志先生、パネラー；2校の小学校
児童、中学校生徒、地域自治会関係者、学
校運営協議会委員、保護者

児童・生徒が地域の大人と”テーマ”につ
いて自由に話し合い、普段は触れ合うこと
の少ない、大人と子どもたちが意見交換を
するという貴重な機会となった。子ども達
がより前向きな姿勢になることと、その姿
を見て地域の大人も一緒になって学んで
いくという啓発の波が起こせた。見学して
いた教職員の意見は「子どもの声、地域の
声を発信し、八木中学校ブロック全体に伝
えていくことはとても大切なことだと思
った。当事者が話すので思いが伝わった。」「
いろいろな世代や立場の方の話を聞く
機会となりあいさつの大切さが、よりはっ
きりした。」等。

これらのことより、地域の方々とも顔見
知りになることができ、ウクライナ緊急募
金を行った際には、地域の方々も協力して
いただくことができた。

(2) 南船地域の他校の取組

ア 地域の方々を講師として招聘

生命の尊さ、社会参画、公共の精神の醸
成と関連させて「地域防災学習」として、
過去の水害の体験や東日本大震災時の様
子などを地域の方々に講話していただく。
生徒達が「その時どう行動するか」や「園
部地域に住む自分の役割」を考え、意見交
流をして考えを深めることができた。生徒
の意見は、「災害が起こった時仲間や家族
と助け合おう。」「生きぬく力・支援力・受
援力を知った。」等

勤労の尊さや意義の理解、社会貢献につ
いての価値を深めるため、地域の事業所
の方々より「各事業所の仕事内容」や「働く
目的・意義」、「仕事の心構え」等、講義を
いただく。実際に事業所の仕事を2~3日
間体験させていただき体験後は職種ごと
に、体験内容や学んだことをまとめ、発表
会を行う。生徒の感想は「親に感謝です。」

「自分のためだけに働くのではなく、社会貢

献だと知った。」「仕事のやりがいを知っ
た。」等

イ 地域の探究・良さを見つける取組

(ア) 和知地域に関して興味のあることを調
べる。「和知の野菜の作り方・味を他地域
と比べる。」「和知の知名度を上げるには。」
等のテーマがあった。生徒の感想は「過
疎化が進む京丹波地域で、地域活性化で
きるかについて考えられた。」「和知の栗
のいい所を知ってほしい。スイーツ開発
できたらいいな。」等で、地域の一員とし
ての自覚と思いをもって郷土の発展に努
める心を芽生えさせることができた。



(イ) 「南丹市・園部町の良いところ探し」を
各自で行う。グループで分野別にまとめ、
発表をする。代表に選出されたグループ
は修学旅行で「わが町の良さ」を旅行先
の方々に伝え、学年全体の中で南丹市・
園部の良さを再認識する。自分たちの住
む町についての新たな発見から、町の良
さを大切に守ってきた地域の方々に対す
る尊敬の思いと、それを受け継いでいく
自覚の醸成に繋がった。

(ウ) 教材名「私の町」を読み、「丹波栗名手・
名人」に認定された京丹波町在住の方
のお話を聞き、「自分たちのふるさとを思
う気持ち」について考えを深めた。生徒の感
想は「栗という美味しいもの、特産品がた
くさんある。魅力に気づいた。」という生
徒たちの感想から、先人の思いと努力に
より守られてきた町の魅力に気づき、次
の担い手としての自覚に繋がる時間にな
った。

ウ 親子道徳

「困ったプレゼント」1年、「夢の力」2
年、「都築さんの悩み～実家の仕事か、自分
の夢か～」3年

保護者が授業に参加することで、新たな
視点による道徳の授業の創造を行い、家庭

における道徳的対話を目的とした。保護者の感想は「中2の子たちが意外と夢を持っているのに驚いた。夢は将来の仕事だけではないこと、何歳になっても夢をもって進める子でいてほしい。」等



エ 花いっぱい運動

地域の花屋さんを講師に招き、花を植え校庭や玄関に飾る。地域コーディネーターやボランティアの方と共に作業する中で、地域の方々と生徒が自然な形で交流する。生徒達が、「多くの信頼できる大人」と出会う機会として、このほかにも職場体験学習を行っている。生徒から「地域の方がいろんなアドバイスをしてくださり、とても楽しかった。」や「難しかったが、12月までしっかり水やりをしていきたい。」と感想があった。



4 成果と課題

(1) 成果

ア 八木中学校の「あいさつ運動」は、中学校からの発案であったが、保・幼・小も巻き込み、町全体に大きなうねりとなった。挨拶をすることにより、“自分も地域も好きになる”取組となった。この背景には、“道徳”は各園・校で共通して取り組みやすいことがあげられる。就学前の子どもから、保護者・地域の大人の方まで一貫して、一緒になって取り組み、考え学ぶことができる。

イ 「親子道徳」については、生徒は、家庭での保護者とはまた違った、大人の意見が聞ける機会であり、保護者は普段聞くことのない、子どもたちの意見が聞ける貴重な

時間となっている。家庭での会話の材料となって継続を希望する意見が多かった。

ウ 地域の方を招いて、生徒に講義をしていただくのは、教師以外の地域の大人に「地域の良さ・地域の特徴・仕事・誇り」等々多くを語っていただき、地域の良さや大人の知恵等を子どもたちに気づかせる意義がある。中学生のころから、地域に興味を持ち、その良さに気づき、地域の大人の思いを知ること、将来、郷土を好きになり誇りをもつことを期待する。

また、生徒たちに、ボランティアや勤労体験などで地域の大人の方に関わっていただく中で、教師以外にも信頼ができる大人がいるということ認識させる絶好の機会となった。

(2) 課題

これまでの地域社会とのつながりを生かして、各校の実態に合わせた「地域道徳」の取組を無理のない形で、且つ関連する内容項目を明確にしながらか「道徳」の中に組み入れ、地域と学校とが手を携えて、「地域道徳」を模索していく必要がある。

5 おわりに

令和3年度のアンケート結果より、「郷土の文化を好きになり、発展に努める」生徒や「日本の優れた伝統を受け継ぎ、新しい文化の創造に貢献する」生徒たちを増やすべく、「地域・保護者が参画した道徳教育」を目指して取組を進めてきた。

各取組において、生徒たちや地域の方々からは心の変容と思われるほどの変化も見受けられた。しかし、このような取組を継続して行うことは容易ではない。常に学校間と地域との滞りない連携・協議が欠かせないのである。

地域道徳は学校における「特別の教科 道徳」を補完し、地域の大人にも影響を与え、社会全体を良くしていこうとするものである。そのため、「考え、議論する道徳」授業への更なる工夫・改善と、中教研道徳部が研究している「主体的・対話的で深い学び」のある授業の構築について、一層追究していくことは言うまでもない。

小中一貫の視点で目指す道徳教育の充実

～「考え、議論する道徳」の実現にむけて～

綾部市立綾部中学校 教諭 船越 美里

1 はじめに

綾部市では、小学校、中学校が共に「考え、議論する道徳」を目指して研究し、実践を重ねている。

令和4年度は、綾部市学校教育研究会で小学校と中学校が合同で道徳教育の研究を行い、研修会や研究授業を一緒に行った。小学校の研究授業の事前研究会や事後研究会に中学校の教員も参加し、研究を進めた。

また、「考え、議論する道徳」を実践する上で、一定の効果があつたと感じたものは、特別活動の「話し合い活動」で、共通点が多いと感じた。ここ数年、本校を中心に校区内の小学校と連携し、話し合い活動の実践を進めてきた。今回は、小中一貫の視点で目指す、道徳教育の充実について以下に述べる。

2 綾部市学校教育研究会道徳部の取組

令和4年11月2日に、綾部小学校で道徳科の研究授業が行われた。

対象	第4学年
主題名	「友だちをしんじる」
教材名	「ゲームのやくそく」
内容項目	友情、信頼
第3学年及び第4学年内容項目の概要	友達と互いに理解し、信頼し、助け合うこと。

この研究授業に向けて、事前研究会・事後研究会を小中合同で行い、意見交流をした。

(1) 事前研究会

同じ内容項目で中学校ではどのような目標になるのか、生徒の道徳的な成長とは何なのか意見を交流した。

研究授業の指導案を読み、意見交流を行った。「小学校の授業の発問は言葉が平易で、何を聞かれているのかが明確である分、話し合い活動が活発になるのではないか」という感想が中学校の教員から挙がった。中学校の授業でも「どの

生徒も考え、議論する道徳」を実現するために、誰もが参加できるユニバーサルデザインの視点として実践に活かすことができると感じた。

(2) 事後研究会

事後研究会では、「考え、議論する道徳」をどのように実現していくかということを中心に意見交流を行った。小学校の発達段階では、自分の考えに理由を加えて伝え合うだけでも内容項目について深めるための議論になるという意見が出た。また、実践の工夫として、タブレット端末の学習アプリを活用し、シートの色を意見ごとに分けて自分の意見を書く活動が行われていた。そのことで、他者と意見を比較しやすくなり、話し合いが活発に進められるという意見が挙がった。道徳の授業だけではなく他の教科での学習とも関連させながら、自分の意見を伝えたり相手の意見を聞いたりする活動に慣れさせることの重要性も、小学校の実践から感じた。

また、内容項目の指導の観点について、小学校・中学校間の滑らかな接続を意識し、それぞれの発達段階で留意すべき事柄を確認した上で中学校の授業の実践につなげる必要があると感じた。

(小学校第3学年及び第4学年 内容項目の概要)
友達と互いに理解し、信頼し、助け合うこと。

(小学校第5学年及び第6学年 内容項目の概要)
友達と互いに信頼し、学び合って友情を深め、異性についても理解しながら、人間関係を築いていくこと。

(中学校 内容項目の概要)
友情の尊さを理解して心から信頼できる友達を持ち、互いに励まし合い、高め合うとともに、異性についての理解を深め、悩みや葛藤も経験しながら人間関係を深めていくこと。

今回、小学4年生の授業の中心発問は「よりよい友達関係をつくるためには、どんなことが大切ですか」であった。児童の意見として、「自分と相手の立場をおきかえて、相手の立場に立って考える」「自分の気持ちを相手に伝える」「相手の気持ちを聞く」という意見が多く出された。

小学5・6年生の学習を経て中学校に入学する生徒に対して、小学校での学習内容の反復にならないよう、中学校の道徳科の授業でさらに多面的・多角的に考え、深めさせるために、学習指導要領に立ち返って各時間のゴールの設定をする必要があると感じた。

3 「考え、議論する道徳」を実現するために

(1) 特別活動との連携

本校の道徳科での授業では、「議論する」場面で、司会者がファシリテーターを務め、テーマについて主体的に考えて意見を発表できる場面が多くなっている。その1つの理由として、特別活動の「話し合い活動の充実」が挙げられる。

昨年度、本校では、京都府中学校教育研究会特別活動研究大会において公開授業校として研究を進めた。特別活動において育成を目指す資質・能力「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」の共通する実践課題として、話し合い活動を充実させてきたのである。

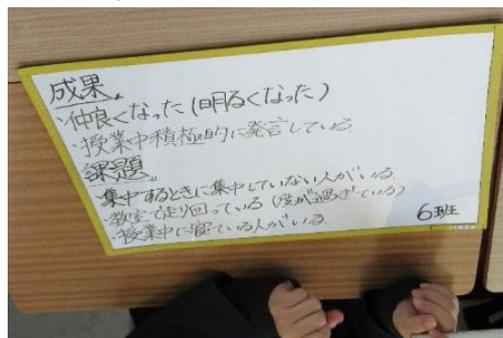
(2) 小中一貫での取組

綾部中学校区の3小学校と連携し、小中一貫で「話し合い活動」の取組を進めてきた。昨年度8月には、綾部中学校生徒会役員と3小学校の児童会委員によるリーダー学習会を開催し、話し合い活動を行った。今年度も各小学校の学級活動で、同じテーマについて話し合い活動を行うことも予定されている。

このように、中学校ブロック全体で取り組んできた「話し合い活動」の充実が、道徳科の授業の議論する場面においても、効果を発揮することができると考えられる。その1つが、「テーマの設定」である。

特別活動の話し合い活動ではテーマを決めるときに、「生徒自身の実体験とつながり、考えたいものにする」と意識していた。例えば、「アルミ缶回収で集まったお金を何に使うべき

か」というテーマで話し合いをしたときは、どのように現状の課題を解決していくのか、様々な視点から多くの意見が出されたことで話し合いが活発になった。



このことは、道徳科の話し合い活動の中でも効果があると考えられる。例えば、「郷土の伝統と文化」について、「高価で手に入れることが難しく、大切ではないという意見もある中で、輪島塗を作り続けている職人さんを支えているものは何でしょう」と問うことにより、自分の生活と結び付けたり、生徒同士の対話を通して「職人の視点」「使い続けている人の視点」「これから伝統を引き継ぐ若い世代の視点」など、多面的に考えることで議論が進んだ。生徒が生きる上で出会う様々な道徳上の課題について、教材をもとに「生徒の実体験とつなげ、考えたい発問」にすることにより、生徒同士の対話を促し、また自分自身の生活との関係を意識させ、ねらいとする道徳的価値に迫ることに一定の効果があったと考えられる。

4 おわりに

道徳性を養うためには、様々な内容項目について、道徳科の授業だけではなく教育活動全体を通して児童生徒に考えさせる場面をもつことが大切である。しかし、それだけではなく「考え、議論する」などの学習方法においても、各教科・各領域または学校間が連携して一貫した指導をすることで、生徒自身が学びの蓄積や成長を感じることができると分かった。

研究会の中では、小中一貫で道徳教育の研究を進める上で、同一教材での道徳科の授業の実践や公開授業の実施を進めていくこともできるのではないかと意見もある。今後も小中一貫の視点で、「考え、議論する道徳」の実現に向けて研究を進めていきたい。

自己を見つめ、よりよく生きようとする生徒の育成

～ 学び合い、つながり合い、深め合う授業として～

福知山市立日新中学校 教諭 田中 昭徳

1 A中学校の実践

学校全体で一致した指導に向けた共有化

(1) 道徳科の授業に対する考え方

ア 道徳性とは、日常生活や今後遭遇するであろう様々な場面や状況において、適切な行為を主体的に選択し、実践できる「内面的資質」であり、行いや行動そのものではなく、それを支える見方や考え方と捉える。

道徳科では、見方や考え方を広げ、深めることで、主体的に判断し行動する「自立」を目指す。

イ 授業では、その教材を通してねらいとする価値を踏まえたうえで、「互いの意見を聞き合い」「考え、議論する」学習を目指す。

ウ 対話的な学びの基盤となる「生徒と生徒の人間関係」「生徒と教師の信頼関係」をより深めるための時間としても位置付ける。

(2) 授業で大切にしたい指導事項【資料1】

ア 「互いの意見を聞き合い」「考え、議論する」時間となるようにする。

イ 自分の考えたことは、聞いている仲間きちんと伝わるように説明する。

ウ 仲間の考えたことをよく聞き、相手の意見を否定しない。

エ 考えは変わってよいため、その時その時の心の動きに寄り添いながら考える。

(3) 1時間の授業の指導過程

ア 導入（授業前の道徳的価値に対する考え）

イ 発問1

ウ 教材を読む（内容理解）

エ 発問2【中心発問】（学習課題）

オ 「つなぐ」・「かえす」・「深める」

カ 振り返り（自己との対話）

※ 発問は、導入時と中心発問の2つを基本とし、繰り返し発問や補助発問を工夫する。

※ 中心発問は、「その教材を通してねらいとする道徳的価値」に迫るものであり、議論が盛り上がればよいというわけではない。生徒が振り返りを書く際、本時の目標を達成するよう発問を工夫する必要がある。

※ 教科書に準拠したワークシートを活用する場

合でも、授業中の指示により発問を変えたり増やしたりするなどの工夫が必要である。発問そのものを生徒に書かせる必要はない。毎時間の振り返りを書き留めることにより学びの記録を残し、評価に生かす。

(4) 発問構成上の留意点

ア 中心発問は、その教材を通して道徳的価値に対する自覚が高まるよう、よりより生き方に迫ることのできる問いを工夫する。

イ 補助発問では、中心発問を行う前段として、例えば、人間のもつ弱さなど内面を見つめることができるようにする。

ウ 中心発問によって道徳的判断・道徳的心情・道徳的実践意欲と態度の育成を図ることができるよう工夫する。道徳的諸価値のよさを授業者から誘導されることなく、生徒の多様な発言からよりよい生き方についての考えを導くことができるよう指導する。

2 B中学校の実践

各教員の主体的な公開に基づく授業研究会

(1) 担当学年・教科を超えた相互参観の設定

…研究部による組織的・計画的な取組の実施

(2) 学校全体の研究主題に即した視点での参観

…全教科を通じた指導の効果について検証

(3) タブレット端末による参観シートの活用

…即時の意見集約による課題の把握【資料2】

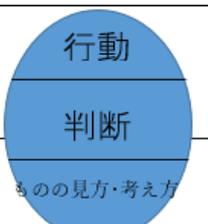
3 実践事例を通して見られた成果

主題・内容項目・ねらいに沿って多様な発言を引き出す発問を検討し、生徒と共に考え合う姿勢を意識して授業に臨んだことにより、生徒が互いの考えを伝え合おうとする場面が増えた。

4 指導と評価のさらなる改善・充実に向けて

発達の段階に応じて内容項目を捉え、「一面的な見方から多面的・多角的な見方へと変化しているか」「道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか」を評価の視点として踏まえ、市の研究主題「自己を見つめ、よりよく生きようとする生徒の育成～学び合い、つながり合い、深め合う授業を通して～」を追求する。

【資料1】年度当初の授業資料 … 授業中の約束事や重点的に指導する内容項目について指導した。

<p>道徳ワークシート</p> <p>() 組 名前 ()</p> <p>質問：あなたは友達とけんかをしました。このあと、どのように行動しますか。</p> <p>あなたの答え</p> <p>行動</p> <p>理由</p> <p>1、道徳の時間とは</p> <p>Q 道徳って何を勉強するの？</p> <p>A いろいろな状況で何かを判断したり、行動したりするとき、その基準となるものの見方・考え方を育てていく学習をします。</p> <p>Q 道徳ってどんな風に勉強するの？</p> <p>A 一時間の流れは・・・(学習内容によっては違うこともあります)</p> <p>① 学習内容に対する授業前の考えを聞き合う</p> <p>② 教材を読む(簡単に内容を確認)</p> <p>③ テーマに沿って考え、議論する</p> <p>④ 振り返り ・初めと比べて自分の気持ちが変わったか</p> <p>・仲間のどんな意見になるほどと思ったか</p> <p>・一時間の授業の中で、自分はどんな風に頑張れたかなど</p> <p>キーワードは、「対話」「互いの意見を聞き合うこと」「考え、議論すること」</p>		<p>2、道徳の時間のきまりごと</p>  <p>○自分の考えたことは、伝えるように説明する。</p> <p>○他の人の考えたことをよく聞き、否定しない。</p> <p>○考えは変わってよいので、その時の心の動きによりそう。</p> <p>3、A 中学校で特に大切にしたい学習内容</p> <p>様々な内容を学習しますが、A 中学校で特に大切にしたい学習内容は以下の5つです。</p> <p><u>自主、自律、自由と責任</u></p> <p>自律の気持ちを大切に、自主的に考え判断し、誠実に実行して、その結果に責任を持つ。</p> <p><u>思いやり、感謝</u></p> <p>思いやりの心を持って人と接する。家族などの支えや多くの人々の善意により日々の生活や現在の自分があることに感謝し、進んでそれに応えていく。</p> <p><u>道法精神、公德心</u></p> <p>法やきまりの意義を理解し、それを守ると共に、法やきまりのよりよいあり方について考え、自分や他の人の権利を大切にする。自分のやらなければならないことを果たして、規律のある社会の実現に努める。</p> <p><u>公正、公平、社会主義</u></p> <p>正義と公正さを大切に、誰に対しても公平に接し、差別や偏見のない社会の実現に努める。</p> <p><u>よりよい学校生活、集団生活の充実</u></p> <p>学校生活で出会う人々を敬い、学級や学校の一員としての自覚をもち、協力し合ってよりよい校風を作る。様々な集団の意義や、集団の中での自分の役割と責任を自覚して集団生活の充実に努める。</p>
--	---	--

【資料2】授業参観シート … 本シートをもとに授業者と参観者で協議を行い、「考え、議論する」道徳の授業に向けて必要なことを整理し、校内研修会で全教員に報告した。

研究テーマ「伝える力の育成～理解して・主体的に・つながりながら～
授業者【●● ●●】 参観者【○○ ○○】

- ・ 授業参観MONTH期間中にできるだけ参観してください。
- ・ 事前に授業を参観することを願います。ねらいを聞く。
- ・ このカードを1枚、藤澤に「送る」
- ・ 参観後は、必ず授業者に話に行く。

ア 「主体的」な学びになっているか

ほとんどの生徒が、教材に描かれている道徳的価値に対して問題意識を持ち、積極的に発言したり考えを書いたりしていた。自分自身との関わりの中で理解を深めることができるよう、登場人物に自分を置き換えて考えさせたり、日常生活や学校生活を想起しながら考えさせたりするような発問が工夫されていた。

イ 「対話的」な学びになっているか

自由に発言しやすい雰囲気があり、生徒と教師・生徒相互の信頼関係や温かい人間関係を基盤に、生徒も教師もともに考え、よりよい行動を求めようとしていた。さらに道徳的価値を様々な面から捉えることができるようにするためには、焦点を絞って考えさせたり、違う角度や立場の視点を与えたりするなど意図的な発問が必要だ。

ウ 「深い学び」になっているか

公正・公正について一貫して考える授業となっていたが、さらに学びが深まるようにするためには、後段で自分の生活を見つめて振り返りながら考えさせることが必要だ。また、グループの話し合いでは、1つの意見としてまとめることよりも、どのように自分の考えが変わったかなどを重視させて全体で共有できるように導くとよい。

エ 「伝える力の育成」につながっているか

一面的な見方から多角的・多面的な見方へ発展できるようにするためには、さらに生徒から多様な意見が出るような発問の工夫が必要だ。また、自分の考えと他者の意見を比較・対照して述べるように導いたり、伝える内容や聞き手への配慮を意識させたりするなど、さらに伝える力が伸びるような指導が求められる。

オ これから「伝える力の育成」を通して、学力向上のために各教科やその他の教育活動の中でどう実現していくのか

どの教科でも、学習する課題に対して多面的・多角的な見方を持ち、事象や文章・図・表等について自分自身との関わりの中で理解を深めることができるようにすることが重要だ。そのために、授業のねらいに即して指導者が意図するような議論が展開されるようにする具体的な手立てやきめ細かな支援が必要だと感じた。

語り合い学び合う授業づくりの研究を深める

京都府与謝野町立江陽中学校 教諭 太田 健策

1 はじめに

与謝地方では、数年前から「語り合い学び合う道徳の授業」を目指して研究に取り組んできた。令和4年度は、1つの資料を使って語り合う場面を設定した指導案をそれぞれが持ち寄り、1つの指導案にまとめたものをもとに江陽中学校にて3年生の3クラスで研究授業を行うこととした。

2 語り合い学び合う授業づくりの実践に向けて

(1) 資料名

「元さんと二通の手紙」あかつき出版
(遵法精神、公德心 C- (10))

規則を破った元さんと、上司との話し合いの場面を、それぞれの立場に立って、規則が存在する意味について考えるとともに、級友と語り合うことで考えを深めていくことをねらいとした。

(2) 生徒の実態

活発で好奇心旺盛な生徒も一定数いるが、思っていることを言葉にすることが苦手で、心の中に秘めた状態で学校生活を送っている生徒も少なくない。そのため、交流の機会を設けるなどの工夫も多く行っているが、考えや意見などが様々に分かれるような教材をあつかう場面になると、静かに答えを待つ姿勢になりがちで、発言する生徒は多くない。そのため、今後も具体的な場面設定のもと、意図的に自分の考えを発言させる機会をつくっていきたい。

(3) 授業実践

ア ロールプレイ

実際に場面を設定したほうが上司の立場、元さんの人柄などを踏まえた自分の考えや言動が出しやすいのではないかと考えロールプレイを行った。

「元さん呼び出した上司と元さんの間にどのような話し合いがあったのか、それぞれの立場になって考えよう。」

2人で話し合った後、何名かが発表する学級や、班で行った後、各班の代表が発表する学級など、学級の様子に合わせて学習形態を工夫した。どの学級も照れが見られたが、これまでに授業に取り入れているクラスもあり、効果的であった。

イ 中心発問



「元さんがこの年になってはじめて考えさせられること」とは、どのようなことだろう。
(生徒の道徳ノートより)

- ・やって良いこととだめなことの判断がちゃんとできなかったこと。
- ・たとえどんなにかわいそうだと思おうとも、心を鬼にすべきだった。どんなに泣かれようと、何かあったとき、命には代えられない。
- ・自分の無責任な行動が、子ども達や周りの人に迷惑を掛けることに繋がっているということ。

ウ 終末

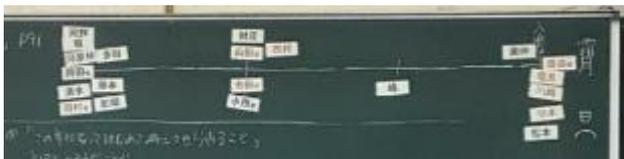
考えの変容を見るために「あなたなら、姉弟を動物園に入園させるか。」という発問を再度行った。導入では、「かわいそうだから。」という意見が多く、「どちらかと言えば入れる」もしくは「入れる」を選んだ生徒がどの

学級でも過半数を超えていた。しかし一時間の授業を通し、再度同じ発問を行うと、8割以上の生徒が「入れない」もしくは「どちらかと言えば入れない」という考えに変わった。これは規則を守ることは安全でよりよい社会の実現に必要なものであるという意識が芽生えたことと、自分の考えだけでなく他者の考えを受け入れようとする姿勢があったからだと考えられる。

導入時のようす

(入れる)

(入れない)



終末時のようす



〈生徒の道徳ノートの感想より〉

- ・規則を破ってでもしたいことはあるけど、その規則には意味があると思うから、自分の気持ちで動かないようにしたい。
- ・四角四面に規則は絶対というのも情けに欠ける。だからといって人情に傾きすぎるのも被害を誘発しかねない。考えさせられた。
- ・規則は安全のためにあるものだし、守らなければいけないものだけど、このお話で、もし元さんが姉弟を入れていなかったら、弟の誕生日は楽しくなかっただろうなと思うと、責任の取り方は難しいなと思いました。
- ・自分が入りたいと言われる立場になったら、どうしたらいいか分からなくなりそう。

そのときの感情ではなく、元さんと上司、それぞれの立場や姉弟の安全のことも考えて、ロールプレイを行うことができていたペアや班があった。

視野を広くもつことや、皆が過ごしやすいための規則にするために必要なことは何なのかなど、様々な感想が見られた。教材に触れたからこその考えを見ることもできるが、教材に触れ

る前に生徒それぞれの考えや立場などを確認することで、考えを広げ、深めたりすることができる様子であった。

授業の様子



(4) 成果と課題

ア 成果

- (ア) それぞれの役になって話し合うことで、異なる立場の考えをもつことができた。
- (イ) クラスの実態に合わせて、話し合う人数や形態を考えることで、より話し合えるような工夫ができた。
- (ウ) 相手を思う気持ちが、規則を上回りがちな内容の中で、多くの生徒が改めて規則を守ることの重要性に気付くことができた。

イ 課題

- (ア) 自分の考えを話すことが難しい生徒もおり、話しやすい発問のしかたなど道徳の授業の工夫と合わせて、学校生活の中での雰囲気作りが必要である。
- (イ) 生徒が自身の体験や日常生活の中にある規則やルールについて考える場面が少なかった。
- (ウ) 単に「かわいそう」、「ルールだから」という意見もあり、考えが深まるように発問を工夫するなどさらなる授業研究が必要である。

3 おわりに

与謝地方では、今後もそれぞれの生徒が自分で考え、まわりと話し合う中で新しい価値に気づき、考えが深まる授業の展開を目指し、各校協力して研究を続けていきたい。

よりよい評価に向けて市全体で取り組んできたこと

京丹後市立網野中学校 教諭 辻 沙佑美

1 はじめに

本地域の研究会では、道徳教育の充実に向け、授業改善につながる研究を中心に取り組む中で、生徒をどう見取るのか、どう評価するのかということについての研究も重ねてきた。他地域の実践等から学んだことを研究部会で交流し、実践しながら取り組んだことを総括し、さらなる改善につなげている。

また、本市では、京丹後市中学校教育研究会で「評価・評定 教科・領域別基本表」（以下、「評価・評定基本表」）を作成しており、各教科や領域での評価基準等を示している。道徳が「特別の教科」となった平成31年度から、道徳についても評価に関わる記載を行っている。

当初は、「どう評価をするか」という点に関心が行きがちであったが、評価をするためには生徒の学びの様子を見取る必要があり、また、評価を振り返ることで授業改善の視点も得られることがあった。どのように授業改善に生かしていくのか、具体的な方策は今後の研究課題になってくるのだが、それも含め、評価に関わる本市研究会の取組を以下にまとめる。

2 評価研究の内容

(1) 生徒の振り返り

生徒自身の学びの振り返りを評価の参考にするため、以下の4つの項目で評価をさせた。

- ①考え方を深め、判断する力が高まりましたか。
- ②共感や感動がありましたか。
- ③考えたこと学んだことを、自分の中で生かしていこうと思いましたか。
- ④教材資料はよかったですか。

「道徳的判断力」、「道徳的心情」、「道徳的実践意欲と態度」を養うことを目標とする道徳科の授業で、生徒が自分の変化をどのように捉えているかを把握することと、生徒にとって興味を持てるものであったか、考えやすい資料であったかを知るねらいがある。「よく当てはまる」

から「まったく当てはまらない」を4段階で評価する形になっている。当初は、授業の振り返りや感想を文章で書かせた後に○をつけさせていたが、数値化して振り返ってからそれを基に文章化するほうがよいという意見により、数値評価をして文章で記述する流れに構成しなおした。

しかし、道徳科の評価の観点は道徳科の目標を達成したかどうかではないため、別の視点で振り返らせる方が良いのではないかと考え、以下のように項目を変更した。

- ①今の自分を振り返ったり、自分との関わりの中で考えたりすることができたか。
- ②仲間の意見や思いを聞いて、考えを広げたり深めたりすることができたか。
- ③これからの自分の生き方について考えることができたか。

これを「学びの整理」とし、授業の中で自分がどのように学んだかを整理した後に、「授業の振り返り」としてどのように感じたかということや、どのように考えたかということを書き流す流れである。

このような各校での取組を交流し、取り入れながら授業改善、評価改善を行っている。

(2) 「評価・評定基本表」

道徳の教科化初年度の「評価・評定基本表」には以下の内容を記載した。

- ①道徳教育の目標及びその内容解説
- ②道徳科の評価の考え方
- ③道徳科の具体的評価の方針
- ④評価事例
- ⑤道徳科の評価における留意点

この基本表を参考に、研修に参加したり学習指導要領解説を読み込んだりしながら各校で研究を行い、初年度の評価を行った。

翌年の研究部会で、初年度に行った評価の実

実践交流とともに、「評価・評定基本表」の見直しを行った。「道徳科の具体的評価の方針」について、実践後に見直すことと実態にそぐわない内容もあり、確認しながら変更を加えた。また、評価事例について、本市で行った実際の評価を基に文例を変更した。

その後、「道徳科の評価の考え方」と「道徳科の具体的評価の方針」については、教師の理解が進んでいると考えられたため、令和4年度版からは記載をしないことにした。一方、授業における困難さがあつたり、文章記述が苦手だったりする生徒の多い特別支援学級で、よりよい評価を行うにはどうすればよいのかといった点が話題に上がったため、生徒の個性に合わせ、学ぶための困難さを取り除き、思考を促すための配慮事項を記載することとした。以下が、現行の「評価・評定基本表」の記載内容である。

- | |
|------------------|
| ①道徳教育の目標及びその内容解説 |
| ②道徳科の評価の留意点 |
| ③特別支援学級での評価の留意点 |
| ④評価文例 |

(3) より良い評価を目指して

道徳科の評価が始まった初年度、個としての道徳科の学習過程を継続的に見取るという初めての経験に対して、教師、特に担任は戸惑いを感じていた。道徳の授業における一人一人の道徳性の高まりを適切に見取り、個々に応じた評価をするためには、事前にどのような手立てが必要なのか、そしてどのような形・構成で文章化し評価するのが良いのかが課題となった。

そこでまずは道徳科における個々の成長を見える化するためのより良い方法を考えた。市内各中学校によって方法に少し違いはあるが、年間 35 時間分の振り返りを1つに収集し、生徒は自身の学びを、そのノートやファイルを見れば振り返ることができる。前項2(1)で述べたように、生徒の振り返りの資料も改善したため、生徒が自身の学ぶ姿勢がどのように変わってきているかも把握できるようになった。また、学期毎に道徳科の学びを生徒に振り返らせる時間を設定している。その振り返りを評価作成や授業改善に役立てている。

次に評価を文章化するために「評価シート」の作成に取り掛かった。評価シートには「大きくくりの評価」の文例が書かれているシートと「特筆する授業の場面」の記述を行うシートの2つがある。大きくくりの評価のシートには、道徳科の授業でどのような学習活動の様子が見られたかを評価するための文例について、自己との関わりを感じて学んでいた様子、多角的・多面的に考えを発展させていた様子等、様々な様子を評価できるよう、多種多様に準備している。それを参考に大きくくりの評価を決め、その決め手となった道徳ノート記述や発言内容等を2つめのシートに記述する。

このような工夫を行い初年度を迎えたことで、評価の方法が明確となり、スムーズに評価を行うことができた。現在は京丹後市内の全中学校で同じ評価シートを使用している。毎年「評価・評定基本表」と「評価シート」、その他評価のために行っている工夫を市の研究部会で共有し、より良い評価に向けて検討している。

3 まとめ

評価をするためには、生徒の学びをどう見取っていくかを考える必要があつた。評価をするのが難しいと感じる生徒がいるとすれば、その生徒の学ぶ姿が見られるような授業を作っていく必要がある。一人ひとりの生徒が自分を振り返って思考したり、他者から学び新たな価値観に触れたりできるような発問や活動を考えることが授業改善につながる実感を得た。授業の中で生徒たちの学ぶ姿が表出し、それを評価していく「指導と評価の一体化」である。

評価が開始されて5年目、研究部会で「大きくくりの評価の内容が似通ってしまう」と話す先生がいた。それは、授業の構成や生徒に考えさせる発問の工夫に原因があるかもしれない。あるいは、教師の生徒に対する見取りに偏りがあるのかもしれない。評価をすることで、生徒だけでなく教師も自身の道徳の授業力の強みと弱点に気づくことができるようになったと感じている。本市研究部会では、京丹後市の子どもたちが豊かな道徳性を育ていけるよう、評価から得られた課題を踏まえ、今後もねらいを持った授業研究に取り組んでいきたい。

特別の教科「道徳」の質的転換をめざして

～京都府下全校でのアンケートをもとに～

京都府中学校教育研究会道徳研究部会

1 はじめに

本研究会では、「主体的に深く考える道徳科の創造」～語り合い学び合う授業を目指して～という研究主題を掲げ、研究を進めてきた。令和元年度から実施された「特別の教科 道徳」から5年目を迎え、京都府下の各中学校では様々な取組が行われてきた。また、コロナ禍においてGIGAスクール構想が前倒しとなり、タブレット端末を活用した実践事例も多く見られた。学習指導要領にもある通り、道徳教育は「特別の教科 道徳」を要として学校の教育活動全体を通じて行うものである。今後、「特別の教科 道徳」の時間をさらに充実したものとするために、生徒と教師に対して行ったアンケートの中から見えてきたものについて、報告を行う。

2 道徳アンケートについて

(1) 実施について

- ・調査目的：道徳教育のより一層の充実に向けて、生徒と教師の実態を把握し、今後の指導方法の工夫改善等に活かす。
- ・調査対象：令和4年度京都府下中学生1年～3年(22,706名)
京都府下中学校の道徳推進教師、及び道徳教育部担当教師
同様のアンケートを令和元年、平成29年にも実施しており、令和元年(以下、前回とする)に行ったアンケート結果と同様の設問での比較を含めて報告する。

(2) 調査内容

調査項目(生徒対象)	調査項目(教師対象)
設問1 道徳的価値の自覚と他者と対話し協働する意識	設問1 生徒の「考え、議論する」道徳科の工夫
設問2 設問1の解答理由	設問2 教育活動全体を通して行う道徳教育の工夫
設問3 「考え、議論する」道徳科の授業の実感	設問3 設問2の具体例
設問4 設問3による心情の変化	設問4 道徳科におけるタブレット端末の活用への課題
設問5 印象に残った内容項目	
設問6 道徳科におけるタブレット端末の活用	
設問7 道徳科におけるタブレット端末の充実度	
設問8 設問7の具体例	

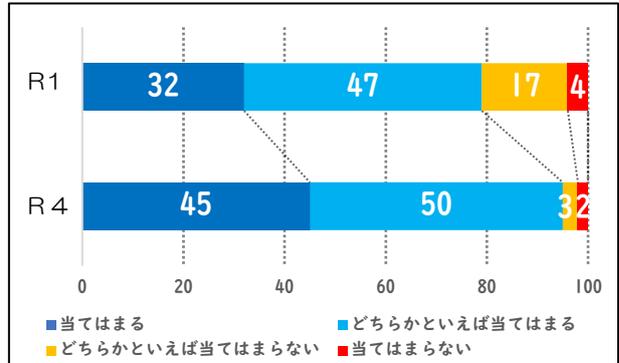
(3) 生徒アンケート結果より（以下、グラフ内の数字はパーセント）

「設問1」

「道徳科の授業では、自分のことに当てはめて考えたり、まわりの人の意見からさらに考えが深まったと感じたりしたことがありますか。」

「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と答えた生徒は合わせて95%と、前回の79%から大きく増加した。肯定的に回答した生徒の割合が9割にのぼることから、道徳的価値の自覚と他者と対話し協働する意識をもって道徳科の授業を実感している生徒が多いことがわかった。

グラフ1 設問1のアンケート結果



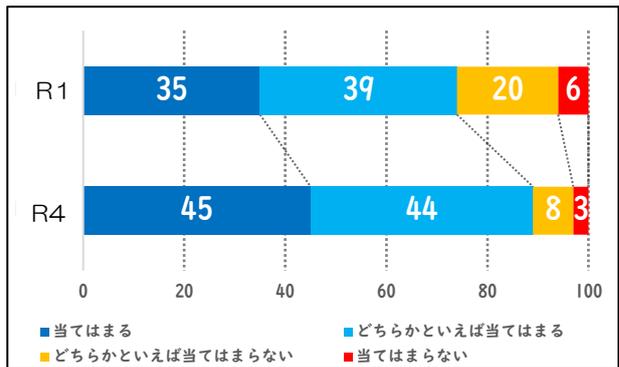
「設問3」

「道徳科の授業では、まわりの人と話し合ったり、議論したりすることは毎時間ありますか。」

「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」と答えた生徒は合わせて89%であり、この設問でも前回の74%から大きく増加した。

道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める「考え、議論する」道徳科の授業を生徒が実感していることがうかがえる。

グラフ2 設問3のアンケート結果



しかし、アンケートからは、自分の意見を言う

ことに苦手意識がある生徒も見られた。タブレット端末を積極的に活用することで、「意見が言いやすい」または、「グループワークがしやすい」という意見も見られたので、苦手意識の克服、活発な話し合い活動、そして「考え、議論する道徳」の活性化にICT機器を有効に使うことができるのではないかと考える。

「設問5」

「これまで学んできた教材の中で、どのような内容が強く印象に残っていますか。当てはまるもの全てを選んで教えてください。（複数回答可）」では、

- ・自分で考え、判断・行動し、その行動に責任をもつこと。
- ・思いやりの心をもって人と接し、支えてくれる人に感謝すること。

など、道徳の内容項目の「A—主として自分自身に関する事」次いで「B—主として人との関わりに関する事」が多数意見としてあげられた。

反対に、

- ・法や決まりの意味を理解し進んで守るとともに、権利を大切に、安定した社会の実現に努めること。
- ・自分も社会の一員であることを自覚し、より良い社会の実現に力を尽くすこと。

など、道徳の内容項目の「C—主として集団や社会との関わりに関する事」が少数であった。各校で作成している年間指導計画における内容項目のバランスにも着目する必要がある。

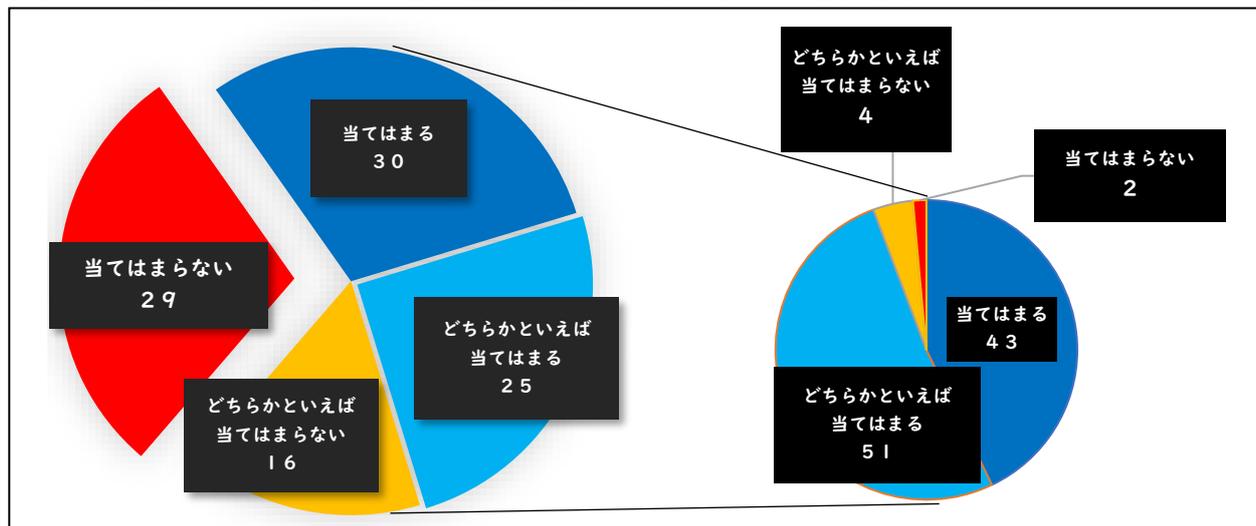
「設問6」

「道徳科の授業では、タブレット端末を使った学習をしていますか。」

「設問7」

「道徳科の授業でタブレット端末を使った学習は、あなたの考えを深めるために役に立っていると思いますか。」という設問に対しては以下の結果となった。

グラフ3 設問6のアンケート結果（左）と設問7のアンケート結果（右）



前回のアンケートでは、タブレット端末が導入されておらず、同様の設問がなかったため、比較はできなかった。なお、設問7については、設問6で「当てはまらない」を選択した生徒以外に行った。設問7より、生徒にとってタブレット端末の活用は考えを深めるツールの1つとなっていることが、顕著な結果として出ていたものの、設問6についてタブレット端末活用の割合が低いことも示されている。

道徳科におけるタブレット端末の活用については、活用事例を各地域で紹介することで積極的な活用を推進していきたい。また、これらの設問については、次回アンケートにおいても同様の設問を設けることで、さらに細かい分析ができるよう今後も経年比較していく必要がある。

(4) 教師アンケート結果より

「設問1」

『『特別の教科 道徳』の授業の中で、生徒の考えを深めるための工夫の具体』では、大きく4点にまとめられた。なお、この設問については、前回のアンケートから大きな変化は見られない。

① 教材について

生徒の状況に近い題材を選び、授業への関心を高めている。また、内容をわかりやすくするために映像や動画などの視覚的教材を用いて、内容理解を促している。他にも、AともBとも選びがたい葛藤教材をできるだけ扱うようにし、生徒が自分自身と向き合えるような教材を取り扱っている。

② 導入・提示の工夫

内容項目をもとに、どんな価値にふれるかを考えて授業の構成を行っている。また、生徒の実態に合わせて、具体的に自分たちの生活場面を例にあげて導入を行っている。

③ 発問の工夫

発問数を2つ程度にして、中心発問に時間をかけるようにしている。中心発問は、事前に何度も検討を繰り返し、生徒が自分自身と向き合えるものと考えている。また、考えを深めるために、教師の

主観による切り返しをしたり、生徒から出た発言をすぐに肯定したりするのではなく、生徒の反応を見ながら、多面的・多角的な視点から切り返し発問をしている。主人公の気持ちを問うような発問ではなく、ねらいとする道徳的価値に迫る内容にしている。また、多くの意見を取り入れるために全員の生徒に発言させることもある。

④ 意見の交流

考えを深めるために、自分自身に向き合う時間を十分に設けている。その後、ペア、小グループ、全体と集団の輪を広げ、発言しやすいようにしている。また、発言が苦手な生徒もいるため、タブレット端末を活用して、無記名で意見を画面に表示し、全体で共有するというものもしている。意見の交流の際にはタブレット端末を活用していることが多く、学習支援アプリを使用すると、全員の意見がすぐに確認でき、グループでの交流も瞬時に行うことができる。さらに、対立意見が出た場合には、その場でアンケートをとることができるといった、様々なタブレット端末の活用が見られた。また、後日に、道徳通信を配付するなどして、意見の共有や自身の考えを振り返る時間を設定している。

「設問2」

「教育活動全体を通して行う道徳教育の工夫の具体」については、以下の内容があげられた。

別業を活用し総合的な学習の時間や特別活動と道徳の授業を関連させることで、相互に道徳の内容項目を意識しながら授業を行っているという意見が多く見られた。教科の授業でも同様に、美術科の作品は1つたりとも同じ物がなく、それぞれに尊重されるべきものであることや、社会科での歴史上の人物の思想、時代背景の変化による価値観の変容などを取り扱っているという意見も多くあった。また、日頃の学校生活のなかで、道徳的な行いがあれば、学級や学年のなかで共有したり、問題が発生した場合には子どもたちと一緒に考えていたり、授業以外の生徒との関わりについても、道徳教育を意識して指導にあたっているという意見もあった。

一方で、少数ではあるが、「特別なことは行っていない。」や「日常の業務に追われ、工夫できるほどの教材研究の時間を割けない。」という意見も見られた。

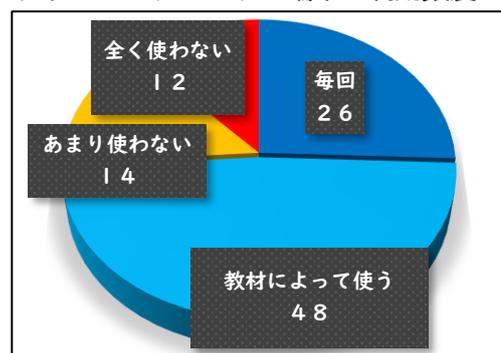
以上のことより、多くの教師が道徳教育を意識して教育活動を行っているということがうかがえる。

しかし、少数ではあるが、「何も行っていない。」という意見もあることから、教師の「道徳教育」についての認識や意識に差が生じているのではないかと考えられる。各校で作成している年間指導計画や別業で再度確認し、校長の方針のもと、道徳教育推進教師を中心に、全教師が教育活動全体を通して道徳教育を行うことが必要であると考えられる。また、各校の学校教育目標や育てたい生徒像を教師全員で共有した上で、道徳科の授業改善にあたることで、より充実した道徳教育を行うことができると考えられる。

「設問4」

授業でタブレット端末を多くの教師が積極的に活用していることがわかる。活用方法として一番多かったのは資料の提示、その次に意見の交流であった。また、タブレット端末の活用により、教材によっては生徒の議論が深まったり考えが広がったりという意見が多く、効果的に活用できていることが分かる。

グラフ4 タブレット端末の利用頻度

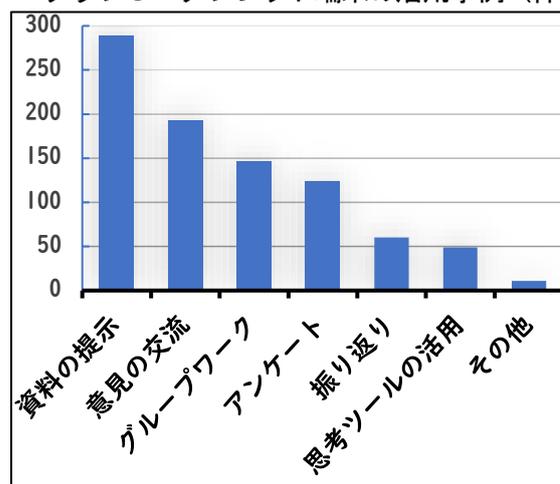


しかし一方で、タブレット端末を活用した授業の課題や不安について、様々な意見が寄せられた。単純に効果的な活用方法がわからないという意見や、タイピングに差が生じてしまうこと、機械トラブルなどで思うような授業展開にならないという意見、道徳で利用できるデジタル教材を充実してほしいという意見があった。

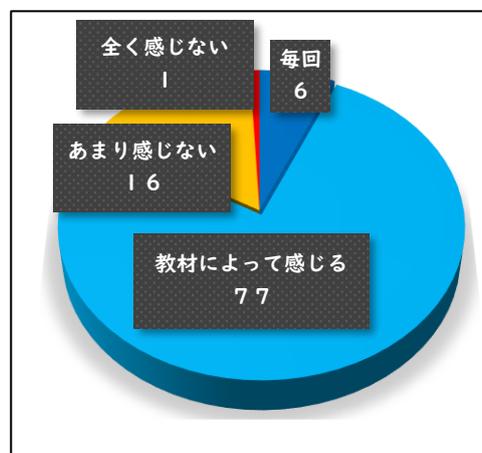
「タブレット端末での意見交流をすることにより、気持ちの交流が問一答のような簡素で味気ない物になってしまうときがある。議論することや友人の顔や声、その場の空気感などを大事にした授業を行うことも必要である」との意見も多く見られた。また、タブレット端末よりも紙に書く方が、意見が深まることもあるという意見や、「活用することが良いことで、活用しないことは不出来である」というような風潮が感じられることに対して、疑問をもつ意見もあった。

これらのことより、タブレット端末の使用方法によっては、深く考え・議論するといったことがおろそかになっていると感じている教員もいる。意見が書きにくい生徒にとっては、良いツールかもしれないが、使用方法に関して、どの場面でのような効果を期待して使用するのが大事だと感じられた。タブレット端末を使うことが良いことではなく、道徳の授業としての視点で、効果的な活用方法の模索が必要だと考えられる。

グラフ5 タブレット端末の活用事例（件）



グラフ6 タブレット端末の活用による生徒の考えや議論の深まり



3 おわりに

アンケートを踏まえた上で、以下のことを次年度以降の取組課題とする。

1つ目に、授業研究の充実である。アンケートを経年比較したところ、道徳的価値の自覚と他者と対話し協働する意識をもっている割合が増加していた。この結果から、普段から実施している道徳科の授業が充実してきていることがうかがえる。さらなる道徳教育に対する意識をもつためにも、これからは各校の道徳教育推進教師を中心とした指導体制の中で、質的転換を伴う授業改善の視点をもつことが必要である。特に中心発問をできるだけ1つに絞ること、そして最後には生徒が教材から離れて「考え、議論する」授業を展開していけるよう研究授業を積極的に行うこと、そのための時間の確保に努めていくことが喫緊の課題である。

2つ目に、さらなる道徳教育の充実に向け、チーム学校として道徳科を推進していくことである。そのためには、学級担任以外の教師とも協力して行うことが肝要である。一人の生徒の変容を複数の教師が見守りつつ、最終的に学級担任が様々な方法を組み合わせて学習状況や道徳性に係る変容を見取る必要がある。その際、タブレット端末を有効なツールの1つとして今後も活用を進めていきたい。

特別の教科「道徳」の質的転換をめざして

～京都府下全校でのアンケートをもとに～

京都府中学校教育研究会道徳研究部会

1. はじめに

2. 道徳アンケートについて

(1) 生徒アンケートの集計及び分析

(2) 教師の道徳アンケートについて

3. おわりに



本日の研究大会のご意見やご感想をご記入ください。

<https://forms.office.com/r/LJaduMeKJu>



京都府中学校教育研究会 HP

<https://www.kyoto-be.ne.jp/fuchuken/cms/>